

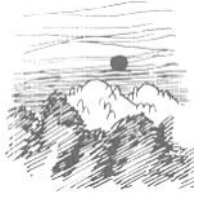
わいわい、がやがや、みんなて哲学



哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行 (記録:安藤彰浩、編集:吉田千秋・中川健史) (主宰)吉田千秋 090-7917-9602

哲学カフェ11周年記念シンポジウム

2019年6月16日
岐阜ハートフルスクエア大研修室

《人口減少化社会をどうとらえ、どう備えるのか?》



開会にあたって・吉田千秋(哲学カフェ主宰)



はじめに挨拶を兼ねて、本日のテーマに関する問題提起を行います。すでにご存知の方も多いと思いますが、前回の国勢調査(5年ごと)の結果、日本で暮らす人の数が減少し始めたことが確認されました。人口減少は今後も確実に進行すると予想されています。問題は人口減少そのもの

ではなく、人口減少化であると理解する必要があります。

明治初期に日本の人口は3,300万人程でした。戦前の15年戦争中、「1億国民総動員」とか言われましたが、それは植民地の人たちを含めた数で、内地の人数は1944年時点で7189万でした。戦後日本人の総人口は増え続け、2004

年12月には1億2784万人にまで達しました。

人口は2005年以降漸減傾向にあったのですが、外国人を含めた総人口の減少が初めて確認されたのは前回の2015年の調査においてでした。これは大正末以来初めての出来事で、メディアでもセンセーショナルに報道されました。1974年出生率が2.05となって人口の増減の境目となる2.07を割って、出生数も75年をピークに減少が始まっていましたが、平均寿命が伸び続けたこともあって、人口の増加は今世紀に入るまで続きました。しかし昨年2018年には、出生率が1.42で、人口が44.4万人減少しています。今後も人口の減少は確実に進行すると見られ、2050年には、人口が1億人を割ると推定されます。

人口減少をどうとらえるかについては、基本的に相対立する二つの見方があります。一つは、人口減少は経済成長の阻害要因で、日本は衰退の危機にあるとする見方です。この立場の人たちは、経済成長のためにも、人口減は完全に止められなくても、和らげる必要があると考えます。もう一つは、日本は元々、狭い国で、大都市に人が集中する

など、人口過密に苦しんでいた。極端な都市化は貧困問題、格差問題を生み、環境問題も引き起こした。人口は減っても社会はだめにならない。この際、人口減少を現実と受け止め、一人ひとりを大切にして、皆で幸せになる様な社会を作る機会とする、というものです。

こうした立場違いで対応も全く違ったものとなります。一つは、何としても人口を増やす努力をして、経済成長をめざし続ける考え方です。もう一つは、大都市、大企業集中の国作りの在り方を見直して、地元の産業、中小企業を支援して再生させる。若者が幸せに生きられる社会をめざす、という考えです。前者の立場に立つ政権与党には、女性にはもっと子どもを産んでもらう必要があると、無神経

な発言をする者も見られますが、これなどは人権無視の暴言以外の何ものでもありません。

立場の異なる様々な意見を聞くことには大きな意味がありますが、今日は、現実を受け止めて対応するという後者の立場の方から、話して頂きます。人口減少が著しい地方行政の責任者として、人口減少によって引き起こされる問題の解決に取り組んでこられた飛騨市市長の都竹さんには、現場での課題や対策など具体的な事例を紹介して頂いていただきます。さらに、将来社会の担い手である若者支援に取り組んでいらっしゃる中川さんには、若者の問題をどうとらえるか、社会は若者支援に何をすべきなのかについて話して頂きます。

報告1

人口減少先進地飛騨市の現状と町作り 都竹淳也・飛騨市長



飛騨市は平成の大合併で、古川と河合と神岡と宮川が一緒になって生まれた新しい地方自治体です。過疎化の進行が著しく、合併時に3万人程だった人口はすでに2万4千人にまで減少しています。私は平成27年まで岐阜県庁に勤務して、知事の秘書などを務め、人口減少化時代の問題に取り組んでいて、この問題には個人的に関心を持ち続けていました。

まずはじめに飛騨市及び岐阜県の人口減少の現状についてお話します。岐阜県では平成7年(1995年)から人口減少が始まっています。今世紀の半ばには150万人まで減る見込みです。人口推定は外れることの少ない予想だと言われている、この数字もまず間違いのないと言えます。誤解のないように断りますが、少子高齢化と人口減少は同じ問題ではありません。生まれる子どもの数が減って同時に高齢者の数が増えても、少産少死であれば、総人口

が自動的に減少に向かうことはありません。事実、子ども全体の数は1975年にピークに達した後、すでに漸減傾向にありましたが、人口は2005年まで増加し続けました。

人口減少は端的に地域経済にとって働き手が減ることを意味します。死亡数が出生数を上回る自然減少に加えて、県からの転出者が転入者を上回る社会減少が重なって、事態を深刻にしています。平成29年、自然減少が8500人で、社会減少が3500人程でした。終戦後亡くなる人の数は減少していき、第一次ベビーブームの際は、出生数が死亡数を3万ほど上回っていました。県人口の社会減少は2005年以降変わることなく続いています。その背景には転入の大部分を占めた住宅事情による転入が減って、仕事を求めて転出する人の数(転出先は主に愛知県)が増え続けているという状況があります。人口減少は国家全体で進行していて、ピーク時の1億2,700万人余り

から2100年には、半分の5000万人となると予想されます。

2006年から始まった人口減少の現実をありのままに受け入れる必要があります。日本の人口は明治以降、大きく増え続けましたが、それは国の政策の結果ではありません。「産めや、増やせや」とっていたのは、日米開戦後の短い期間のことで、実は人口抑制が明治政府の基本政策でした。戦前の産児制限策、避妊の勧め、戦後の妊娠中絶の合法化なども、そうした政策の一部と見なすことができます。1960年代の高度成長期で、日本社会の工業化が著しく進んだ時でも、労働力確保のための人口増ではなく、人口抑制が日本の政治のテーマでした。政府は資源の乏しい狭い国土に人が多過ぎるという基本認識を持っていて、戦後も多くの日本人が移民として海外（ブラジルや米国）に移住しています。

出生率の低下が問題化するのは1990年代に入ってからです。出生率が1990年に1.57となって、国民白書ではじめて少子化対策が議論の対象になりました。

少子化の原因は主に三つあげられます。一つ目は、母となる世代の女性人口の減少。二つ目は、未婚者の増加。三つ目は、晩婚化とそれに伴う晩産化です。昭和48年（1973年）以降、出生率は低下傾向にありましたが、減り方が漸減で、人口増加は続いていたので、政府は深刻に考えませんでした。

- 1) 母世代の女性人口の減少は少子化の決定的な要因です。行政の産児、育児支援策などで、出生率は若干回復しましたが、ほとんど焼け石に水の結果しかもたらしません。母なる女性の数は政治の力で左右できるものではないことをわきまえる必要があります。
- 2) 未婚者が増加しています。すべての女性が子どもを産むわけではありません。そもそも結婚する人がはっきりと減少しています。30代前半の女性の3割が未婚です。結婚イコール出産ではありませんが、両者には並行関係があって、結婚が減少すれば、出産する女性の数も減少します。50歳の時点で結婚経験のない人の割合が昭和60年以降上昇を続けていて、平成27年に、男性の場合、岐阜県で20.1%、全国平均で23.4%、女性の場合、岐阜県で10.0%、全国平均で14.1%になっています。この時点で結婚経験のない人は生涯未婚の可能性が高いと言えます。結婚しない理由として「結婚資金が足りない」といったお金の問題の他に「異性とうまく付き合えない」という理由が挙げられていることが目を引きます。かつては見合いが男女の出会いの機会となっていました。見合い結婚がほとんどなくなった。戦前は7割近くが見合い結婚で、恋愛は13%ほどにとどまっていました。戦後、見合い結婚の割合が急激に減少、反対に恋愛結婚が増加して、65年前後に割合が逆転、現在、見合いは5%、恋愛が90%近くになっています。75年から2000年の比較で言えば、恋愛結婚の割合は増えても、絶対数は変化



都竹淳也さん

しておらず、見合い結婚が減少した分だけ、未婚者が増えたということが言えます。

- 3) 平均の初婚年齢は緩やかに上昇し続けています。1960年時点で、男の場合27歳、女の場合24歳前後だったが、2015年に、男30.4歳、女28.5歳となっています。結婚年齢が上がれば、必然ではないにしても結果として子どもの数は少なくなります。また女性の場合、35歳を超えると、生理的に妊娠する力そのものが弱まると言われています。晩婚が結果として晩産を、晩産が子どもの数の減少を条件付けることとなります。

今後、社会状況や人間関係のメカニズムが変わって、ポジティブな方向に結婚環境の劇的な変化があると考えるのは、明らかに非現実的です。仮にこうした激変（出生率が人口が減らない人口置換水準2.07を回復しても）があったと仮定してみても、人口減少を止めるためには、60年程かかると言われています。私たちは現実をしっかり受け止めて、人口増加はないという前提で考える必要があります。

飛騨市の現状について話します。飛騨市は古川町、神岡町、河合村、宮川村の二町二村の合併から生まれました。古川の人口は大体横ばいを保っていますが、鉢山廃坑以来神岡の人口減少が続いていて、その分、飛騨市を構成する地域の人口は減少し続けています。働き口が減れば、若者は職を求めて、転出していきます。2035年、飛騨市では、高齢者の数が非高齢者の数を上回ると見込まれています。単身高齢者の数が増加して、特に高齢の女性の数が増えて、飛騨市は今世紀半ばには、多分90代のばあちゃんが年代別の最大グループを形成する時代になると見込まれます。

飛騨市は子どもの数を増やすことを目標にせず、高齢化の現実に対応する対策に取り組んでいます。人が減れ

ば、消費が減少して、物が売れなくなります。当然域内の商業やサービス業は停滞します。反対に住民の高齢化で、介護や医療、福祉関係の需要は高まっています、この分野では人手不足の状態が生まれます。特別養護老人ホームの施設はあっても、人手不足で受け入れることができません。子どもがいても、学校や幼稚園は担い手不足と人材の高齢化で閉鎖を余儀なくされることもあります。製造業は海外と取引している業者が多くなっていて、受注は沢山海外から入って、需要があるのに、働き手が不足していて、注文に応じられないという問題が生じています。

地方の人口減少によって、地域の行政は過疎、住民の高齢者化にどう対応する必要があるのか、事例をいくつか紹介します。物が売れなくなって地元の商店が閉店しても、住民がいなくなる訳ではありません。買い物弱者である高齢住民の生活の必要を満たすために、例えば車による移動販売を支援しています。顧客は高齢で足が弱っていて歩くのに不自由な人が多いので、車はエンジンをかけたまま地域を数軒ごとに回ることになって、ガソリン消費が多くなります。タイヤの消耗もひどくなるので、市はガソリン代やタイヤ代を補助します。

また、高齢者の健康維持を兼ねて、人が集まる買い物サロンを作って社交の機会にして貰う様にしています。さらに、冬の降雪の際、雪下ろしのできない高齢者のために、建設業者などが雪下ろしを代行する仕組みを作りました。一度登録するだけで、後は、申請は不要で、一括して行います。

高齢者が多いので、割的に要介護の人間も多くなります。人手が足りないので、十分身体を動かせる人には支え合いヘルパーになって協力してもらいます。動いて、人との触れ合いを楽しんで、健康維持にもなって、要介護にならない予防策にもなります。

医療分野では、医師不足に悩まされていますが、研修医制度を活用して、飛騨市民病院で地域医療を経験する実習プログラムにたくさんの研修医に参加して貰って、医師不足を補っています。地域密着の医療を学ぶ場所として興味を持って貰えるようになって、富山大学の医大生を中心に今年度は38人の研修医を確保しました。

単身高齢者が亡くなって空き家となった家屋を有効に



活用する様に努めています。空き家を補修して、旅行者の宿泊施設として利用する取り組みを財政的に支援しています。外国人も多数宿泊に訪れるようになってきました。また改修して貸し出す業務を行う不動産業者も支援しています。

教育に関しては、地域全体で学校運営に協力する取り組みをしています。児童数の減少で、運動会など学校行事が出来なくなっている学校を住民参加のふる里大運動会に



変えて、地域住民にはボランティアで運動家の運営にも関わってもらっています。

継承者がいなくなり、存続の難しくなった獅子舞など、伝統芸能を若者に学んで貰って保存する活動を行っています。地域外の若者にも参加してもらっています。また、飛騨市ファンクラブを作って会員を集め、一緒にバスツアーを行ったり、ファンクラブの記念グッズを作ったりして、地域交流を進めています。

締めくくりと言えることは、人が少ないことで、逆に、一人ひとりに充実したサービスを行うことが可能となります。地域内の福祉施設のサービスを充実させることも、外国語など特殊能力を持った人材を手厚く支援することもできます。行政に求められているのは、人が少ないことで一人ひとりを大切にすることを真剣に考えることだと思います。



報告2

若者が元気に歩めるように..若者支援の目的と課題
中川健史・NPO法人仕事工房ポポロ代表

報告する中川さん

仕事工房ポポロの中川です。かなり前からひきこもりや不登校の子ども、若者を支援する活動を行なっています。多忙でこのところ例会に顔を出していませんが、「哲学カフェ」には通信の編集に関わっていて、毎回、原稿にはしっかり目を通しています。

今日は若者支援の現状と課題について話します。若者支援と言いながら、当初と比べ支援対象が若者とは言えない年齢層を多く含む様になってきました。若者に分類されるのは通常10代20代の人たちだと思われませんが、近年、支援活動で30代から40代の人間に非常に多く関わる様になっています。

本来、社会の中心的な担い手となる人たちが、職を失うとか、人生の挫折を経験して、ひきこもりになるといった事が起きています。ひきこもりの高齢化は、80代の年金生活の親が、40代から50代、場合によっては60代の子どもの生活を支えなければならないという、思わぬ複合作用を伴う結果となっています。社会に適應できない人の高齢化の現象は、年金生活で財政的にそれ程余裕がある訳ではない者にとって大きな負担で、家族共倒れの危険が高い、非常に好ましくない負の連鎖の状況を作っています。

残念な事にこうした困難な状況に付け込む悪質な者たちがいます。最近相談を受けた48歳の男性は、リーマンショックで仕事を失って、自治体の生活保護に頼って生活していました。彼は困った人たちを喰い物にする貧困ビジネスの寮の住人で、寮の管理者に生活保護の給付金をそっくり取られていました。また、2か月毎に23万円の給付を受けるある女性は、家賃に月9万円払っていて、1か月に2万円で暮らしていました。こうした人たちにとって、結婚は夢の中に出て来る話でしかなく、人生の一部とはなりません。

思わぬ形で訪れる貧困は一人の人間の人生設計を狂わせてしまいます。それは次の様な統計からはっきり読み取ることができます。第一次ベビーブームのあった前後10年に生まれた今60歳から69歳の世代は1680万人いて、その世代の子ども世代に当たる第二次ベビーブームの前後10年に生まれた今35歳から44歳の世代は、およそ1664万人います。少し減っていますが、ほとんど変わりません。しかし、今5歳から14歳の孫世代と言える第二次世代の子どもの世代は、1055万人しかいません。生まれるべき子どもの3分の1が生まれることがなかったために、第3次ベビーブームは起こりませんでした。第二次ベビーブーマー世代は就職氷河期を経験した世代です。多くの者が安定した職に付けませんでした。この世代の多くが家庭を持つ夢を実現できませんでした。



中川健史さん



ひきこもって職に着かない人たちは、さらに根深い偏見に曝されます。多くの方が、誰でも働けば自立できると信じています。人間は働いて一人前、結婚して一人前、家庭を持って一人前、家を立てて一人前などと言う「一人前神話」があります。政府の統計によれば、ひきこもりに数えられる人は全国で120万人ほどいます。社会の眼差しは暖かいものではありません。最近、ひきこもっていたとされる方が関わる殺人事件などがメディアで大々的に報道され、ひきこもりイコール犯罪予備軍の様なイメージが生まれ、ひきこもりを抱える家族は心穏やかではありません。日本は精神病患者を病院に長期にわたって入院させる傾向があるとされていますが、これは本人の治療を目的としたものではなく、精神病に対する偏見から、長期間、社会から隔離して、犯罪を防止しようという考え方からのものです。

人間にとって必要な事は社会の中で何らかの役割を果たすことです。仕事は儲かる儲からない以前に、働く本人が何かの役に立っていると感ぜられることに意義があります。仕事を通じて他の人とのつながりを作ることでもできます。仮に障がい者で、仕事が十分にできなくても、他人の

役に立っていない訳ではありません。彼らは介護の仕事をする人に、雇用の機会を与えているとも言えるからです。

(スライド紹介された絵は)不登校の子どもが描いた絵です。社会の眼差しを、不安を掻き立てるもの、脅威として表現しています。私たちは日々の生活の中で協調し合い分かち合うことが大切です。私たちは知らず知らずの内に営利を追求する企業の論理でものごとを考えてしまっています。企業は儲けを上げる為に、日々同業の他の企業と競争をしています。私たちの生活の中で大切なものは、競争ではなく、協同であり、分かち合いであることを忘れないようにしなければなりません。

社会は一人の政治家によって変えられるものではありません。私たち一人ひとりが主権者として力をつけて支えられることが必要です。貧困率が低い国がありますが、そこでは所得の再分配が大幅に行われています。富者ももっと富者になって、貧者ももっと貧者になる格差の拡大を認めない社会を選択しなければなりません。そのためには人々が協力し合うネットワークを作り、それを社会の共有財産にしなければなりません。根深い偏見を克服して、マイナスをプラスに変えていく努力を続けていく積りで。

意見交流

* 感銘を受けた。現場で具体的な問題の解決に尽力されている地方自治体の行政責任者の話を直接聞くのは初めての事だった。新鮮なものを感じた。中川さんの若者問題も直ぐに解決が出来るものでもなく、非常に粘り強い取り組みが欠かせないものだと思う。産めや、増やせやといっていたのは、短い期間の話に過ぎず、政府は明

治以来ほとんどの期間人口抑制を考えていたという話しは、目から鱗の様な話だった。中国の一人っ子政策の様な人口抑制策は人権侵害の恐れがある。政府は人々に子どもを産めとか、産むなとか口を出すべきではない。地域にはそれぞれ異なる問題がある。名古屋で地域の福祉活動に関わっているが、高齢化、人口減少は中心



市街でも進んでいる。住民に関して言えば、中区も近い内にジジババの町になる。若者が結婚しない。生活がぎりぎりです。所帯を持つ余裕がない。家賃補助とか生活支援が必要である。生活にゆとりのある人たちが協力して地域の課題に取り組まねばならない。

- * 自閉症で聴力過敏の女性の書いた自伝的な本を読んだ。彼女は子どもの頃から、周りから地獄耳と言われ嫌な思いをして来た。障がい者が気楽に行ける場所、生きる場がない。
- * めったに聞けない興味深い話だった。現場の声はやはり説得力がある。大切な事は人間同士であるってことを忘れないこと。それが出発点ではないか。
- * 都竹:コミュニケーションの能力が大切です。全ての人がそれを十分に持っている訳ではないってことを知って置く必要があります。通常は周りの人が皆で足りない分を補って何とかやって行くことができます。「向こう三軒両隣」という言葉があります。私も文字通りそうした近所付き合いをしていて、色々な事を学んでいます。銭湯に行く人も色々です。熱いお湯を好む人、反対にぬるいお湯を好む人もいます。右隣りは嫁姑の仲が良く、左隣りは反対に仲が悪いとか。他人と付き合うことで、様々なことを知ります。他人に応じた接し方をする必要もあります。子ども時代に他の子どもとたくさん付き合った経験のある人が、大人になって複数の子どもを持つ親になる傾向があると言われています。豊かな交流経験を持つことが問題解決の糸口になるかもしれません。
- * 中川:聴覚過敏の話がありました。私は精神病理など心の問題の専門家ではありません。障がいを持った者はそれぞれの障がいに応じて異なる問題を抱えています。しかし、私の対応はある意味同じで、障がい者が健常者と違うことを価値だと見なす様になっています。本人は自分

の魅力に気付いていません。ポジティブに人と接することが肝要です。人をダメにするのは簡単、好い所を見つけて褒めてあげる。それによって当人は自己肯定感を高めることができます。

- * 地方には地方の良さがある。過疎地には過疎地の良さがある。人間同士のつながりが密で、当たり前のように互いに助け合う。周りの人たちはカップ麺や菓子パンばかりを食べている人のことを心配してあげる。
- * 市長が役所の外へ出て市民と交わり、直接声を聞く。素晴らしい事だと思う。
- * 最近、高齢者の交通事故のニュースを頻りに耳にする。高齢者ならば、むしろ外に行く必要があるとも言える。ほとんどの高齢者はどうしても病院を訪れる必要がある。行政が人が元々集まる病院を社交の場にしてはどうか。
- * 都竹:人口減少の結果何が起きるかを事前に予想することは容易ではありません。問題を先取りして、前もって取り組むことができません。地方は人と触れ合う機会を持つことができます。飛騨市の職員にも、外へ出て住民の



声を直接聞く様に勧めています。小さい町は都市と比べ容易に住民自治の意識を高くすることができます。車に乗る高齢者は、本当はやめたいけれど目的があって乗らなければならないから、やむを得ず乗るというよりも、習慣だから乗ると理解した方が正でしょう。病院への行き来を業者に委託するとかいった方法では解決にならないというのが実情です。

* 行政区域を狭めれば、それだけいっそうきめ細かいサービスが可能になる。よく考えれば理解できること。では平成の大合併は何だったのか。行政区域は小さくした方が好ましい。高齢者の移動の問題だが、人間は動く自由を求める。交通手段を持つことは個人の権利であると思う。

* 資本主義の利益追求のメカニズムを変えないと何も変わらない。障がいがあっても、人を上下に分ける根拠とならない。大事なことで、社会の価値観を変えなければならぬ。

* 都竹:市町村合併は地方交付税を減らすことが目的でした。合併しないと小さな自治体は生き残れないという見方があったが、白川村はうまくやっています。他方で、合併は防災対策を行う為にはメリットがあると言えます。行政の仕事は小さな地域単位で考える必要があります。移動の権利は保証されなければなりません。本人は車に乗りたいが、家族は反対するという問題をどう扱えばいい



のでしょう。出前タクシーも考えられます。それだけでは全ての解決にはなりません。障がい者支援は、障がい者一人ひとりに対するオーダーメイドでなければなりません。例えば、聴覚過敏の人の就労支援においては、当人にしっかり対応するために、職場で問題認識を共有する必要がありますがあるでしょう。

* 中川:地方は、これまでの様に、ただ企業を誘致するか外部から人を招くとかいったことだけではダメではないか。多くの地域住民が直接関わることが必要ではないか。福祉にお金を出せば、回り回って消費になって、経済活動の支えとなる。発想の転換は求められる。引きこもりの人たちは、生きやすい社会はどういう社会であるのかを教えてくれている。そういう価値もある。

* 社会が急激に変化するとうまく対応できないで問題が生じる。ベーシックインカムをどう思うか。

* 日本は先進国の中で、例外的に男女の格差が様々な分野で大きい国である。国会を見ても、女性議員はほとんどいない。未婚や晩婚の問題も無関係ではない。

意見交流を終えるにあたって



都竹:ベーシックインカムは好い方法かもしれませんが、しかし現状では実現が難しいでしょう。仕組みを根本から変えることが必要になるでしょう。議論が不十分で

理解も乏しい状態です。新しい仕組みとして個人的には興味を持っています。人口減少化の問題を考える場合、通常女性ベースで考えます。興味深いことに、データを見ると働く女性の出生率が高いことが分かります。日本社会は女性にもっと力を発揮する機会をつくる必要があります。ただし地方では、もっと女性を登用して女性の能力を活かすことに、否定的である女性が少なくありません。女性の力をフルに活用するにはまだ時間がかかるでしょう。何年か後には全然違っているかもしれません。最後に、人口減少化によって、人間一人ひとりの価値は高まるでしょう。克服の困難な重大な課題であることは否定しませんが、チャンスでもある。人間が個人としてこれまで以上に尊ばれる時代は、大都市ではなく周辺部で始まるでしょう。



中川:ベーシックインカムは出来るなら導入すれば好いと思います。これによって人が働かなくなるという懸念は不要でしょう。人はお金の為にだけ働いている訳ではありません。若者問題を考える集まりを開いても、若者自身の参加が多くありません。若者は、この種の集まりは年配の人たちの上から目線の話が多くて、うっとうしいと感じるようです。この問題に関わる上で欠かせないことは、若者を助けてやるではなく、君たち若者の力が必要だ、いっしょにやろう、という立場で取り組むことでしょう。老若男女上下関係を作らずにやっていければと思います。

吉田:人口減少化の問題については、哲学カフェの昨年末の例会でもテーマとして意見交換をしています。その際も、経済成長路線ではなく、この際人間らしく生きていける方向に切り替えたら、という意見表明が幾つもありました。日本はそれなりにうまくいってる様に見えるかもしれませんが、しかし、人々が余り目を向けない底辺で、否定し難い大きな息苦しさがあります。引きこもりの大人の姿は見えない所であって、事件でも起こさない限りほとんど話題にされることすらありません。普段見えないものをしっかり見る必要があります。平均的な社会の見方にとらわれていては、見えてこないものがたくさんあります。既成の価

値観、歴史観を無批判に受け入れるのではなく、自分の目で世界を見直すことが不可欠です。時の権力者、エリートの視点でものを見るのではなく、民衆の視点で見る様に心がける必要があります。現在の資本主義のあり方も、成長経済路線も、あらかじめ定められた様なものではありません。もっと自由に考えなければ前は見えません。どんな選択をするにせよ、人間が人間らしくあることができる、ということが大切です。そのためにまず、人間を一元的に価値付けすることを止めなければなりません。働いている人が、障がいのために働けない人より人間として価値がある訳ではありません。そもそも人間を価値づけて、上下のランク付けするのは根本的に誤っています。存在すること自体が価値で、個々人の違いに意味があると言えます。一人ひとりの人間は弱いものです。バラバラになって悲観するのではなく、手を取り合ってつながりあって生きる必要があります。人間のより良い未来は、競争に惑わされないうで、協同の道を見出していくことにあると思います。人類はまだ十分でないとしても、全体として既にそういう方向に向かっているのではないのでしょうか。

本日は、お二人の方から貴重なお話をさせていただき、さらに会場からもたくさんの意見をいただきありがとうございました。

みなさんの感想

- *飛騨市長さん、中川さんの発言に引き込まれた2時間半でした。メモ15枚ゆっくり整理したい。
- *飛騨市、がんばってください。違いを価値にたかめられるか、私の受けた課題です。
- *日本の人口減少化社会に対しての2つのとらえ方を、わ

かりやすく解説していただき感謝しています。他方、世界は人口増加社会であり、経済の側面だけでは消費が弱い消費が弱い日本社会は、産業発展がどう継続していくのか不安がある人は多いのでしょうか。ですが、今日の話をお聴くと少しは不安の渦から逃げ出せる気がします。

- *大変有意義な会でした。このテーマは日常のニュースなどで、そのつど考えさせられることが多いのですが、じっくり考える機会はあまりありませんでした。お二人の提案や参加者のお話などから、いっぱい学ばせてもらいました。ありがとうございました。
- *「人口減少の地は一人ひとりが輝く」「違いを価値に高められる」日々実践しておられる方の思い言葉だと思いました。
- *お二人とも大変面白く？聴かせていただきました。少子高齢化の問題に対する姿勢を教えられました。特に、現場で課題を見出し、工夫して解決されていく市長さんの手法が素晴らしいと思いました。中川さんの「どんな人にも価値がある」とのお言葉に感銘を受けました。
- *思うことは多々ありますが、なかなか行動に移してこれなかったことが、我ながら悔しくもあります。自分には…なかまが、力がないのに…。若い人たちがとても力強く、聡明にしてくださっていてとてもうれしくおもいます。ただ、いつも考え心を柔らかに、思いをともにしていこうとおもっております。ありがとうございました。
- *いろいろな人たちがいて、障がい者であろうがなかろうが、存在していることに意味がある。まだ、日本政府では精神障がいについて、いろいろ名前をつけダメな人間のようにしている。それを同じ人間として、かわっている人達として認めてもらいたい。イタリアでは精神障がい者はいないという、日本でいう障がい者も同じ人間として生きているのだと思っています。
- *哲学カフェに若者を増やす方法として、SNS(インスタグラム、ツイッタ―など)を活用すると効果が高いのではと思いました。
- *都竹淳也さん(飛騨市長)、中川さん(NPO理事長)、お二人の話聞くことができて、大変感動し勉強になりました。ありがとうございました。
- *いい企画でした。これをきっかけに参加者が、各人の住んでいる地域でのボランティア活動がさかんになる仕組みを考えるきっかけにしましょう！ 住民こそ街づくりの担い手であるでしょう。
- *減少化現象はグローバルな資本主義・新自由主義のなかで収入が200万未満の非正規雇用が増え、結婚しようにもできないとか、二人以上は育てられないとかの生活上の負がいっぱい。そして高齢化に伴う介護の人手や商品製造にかかわる人口が不足で、資本の論理から人口減少が心配というのはナンセンス。社会保障の財源は社会の仕組みを変えれば十分にある。政権選択の問題と思う。女性講師の配置があるとよいのでは？
- *都竹さんのお話は、高齢社会での地域に沿った施策が創意的で感心させられた。中川さんのお話でワーキングプアについて時間がなく、聞けなかったのは残念でした。少子化の経済的背景として、労働法制の改悪により非正規雇用労働者が4割もあり、年収200万以下の世帯が拡大している。もっとそうした現実を聞きたいです。
- *役割——の考え方 〈いるだけで価値がある〉 〈社会のまなざし〉 〈分かち合い〉 〈希望をもたらす〉 〈競争〉 〈分断と絶望〉。何かできることがあるはず…探している。
- *都竹さん、中川さん、おひとりづつに3時間ぐらい時間をとって、じっくりお聞きしたかった。山梨市も3万人からどんどん減っていく、とても参考になること、市の職員皆に聞かせたいです。中川さんのお話、私たち80歳と76歳、子ども4人。50歳と40代3人。私たちの時代は仕事がたくさんあった。子どもを育てるために必死に働いた。根深い「一人前」神話、いい学校を出て大企業に働いて～若い人たちはそこからこぼれていく。いつ頃からか？今の若い人たちはたいへんです。
- *リーダーからとらえた視点より行動され、市民の理解を深め成功されている市長さんの話、大変良かったです。また、弱者の方の相談を聞き、永く活動をされている中川さんの話、頭が下がる思いです。自分のできることを探したいとおもいました。
- *人口減少社会と一口にいても、いろんなしがらみがあると知りました。どうして良いのか答えはできませんが、まじめに向き合って対処していくことが大事ですね。
- *若者の声をもっと聞けたら！ 若者が声をあげて、それが集団になって政治をかえていく力となる実感を少しでもつかんでいける社会になってほしい。選挙も間近！
- *飛騨市は私共もとても身近な市です。先進的(?)な手法で取り組んでくださってうれしいです。どうぞ、お体を大切に 皆さまいらしてください。ありがとうございました。
- *全国どこでも都竹さんや中川さんのような方がいてくだされば、住みよいところになると思うのですが…。
- *「生活保護のお金は地域におちるお金。むだ金ではな



い」という中川さんの言葉が印象に残りました。大切な視点で勉強になりました。

- * 都竹市長の政策がすばらしい。空き家活用のゲストハウスに興味あり。障がい者の人にできる仕事をつくりだすという姿勢もすばらしい。
- * いつも物の見方・考え方を学び、変えていくことを教えられるシンポジウムです。できることを、少し休みながら続けていきたいと思えます。齢を重ねることの数少ない魅力はここにあります。
- * 都竹市長の「人口減少問題」に取り組む姿勢のすごさに感心した。データーも細に亘り微に亘りとりいれられて広範囲な角度から調べられてすばらしい。ところで飛騨市の政策をお聞かせいただいたが、その根拠となるデーターおよび市民の声との関係をほとんど聞けなかったのが残念です。またの機会に政策と市民の民意との関係をおきかせください。
- * 飛騨市長の話は有意義で面白く楽しかったし、ここなら住んでみたいと思った。移動販売車の補助は、山梨市の美山地域で適用できそうだし、飛騨高校の生徒に対する働きかけは、郡上高校のものによく似ている。横の連絡もされているんだろう。中川さんの話は身につまされたが、協同ネットワークへの取組みに賛同し、できる応援はと考えてみた。
- * 一人ひとりが尊重される社会が大事であると思いました。
- * 「新しい社会のカタチ」「もう一つの社会」(中川さんのレジメ)は、ただ心構えだけではできるものとは思えません。若いころに燃えた社会の生産関係を変革し、資本主義ものりこえ、社会主義・共産主義をめざすことでしか実現しないと考えて活動したことをなつかしく思いだし

ました。でも、結局はその社会の構造が変わらないと意識は変わらないように思います。

- * 飛騨市長の施策、今できる事、身近な些細なことへの気づかいを支持します。飛騨市は山間地なので、都市化が進んでいる岐阜市周辺では無理な施策もある。都市化の進んでいる岐阜市周辺には、明石市の施策にも関心を持った方がいいと思います。私は日本の不動産等の絶対的価値からして人口はまだ多すぎると思います。日本国で衣食住の安心安全を担保する許容量は絶対価値の範囲内で、その数はいまは多すぎると思います。過去から今に至るどの時代も満足のいく状況を実現していない。(略)
- * 今回の都竹さんのお話は生き生きとして、楽しそうで、「まちづくり」に携わっている私には大変参考になった。人口減少化社会の問題を逆手にとり、市民と協働して次々と成果をあげられ、行政のトップが市民目線で実践的に先頭に立てば、こんな風になるものだと、改めてリーダーシップの重要性を感じた次第です。昔から、「大問題の解決は、隗より始めよ」とか。都竹さんはそれを見事に実証しておられるような気がする。ただ、労働者不足の時代、外国人労働者の国内流入は不可避であり、それに伴う将来的問題の予測とその対応について意見交換できなかったのは残念だったが、今後の課題としたい。
- * 飛騨市は高山市と同じように、すでに過疎化しつつある町村が合併した市。多くの困難を抱え難儀されている話なら気がすすまないな。でも、チラシの都竹市長の顔は明るく朗らかそう。人口減少を明治までさかのぼって、推移、要因をあきからにして、飛騨市の今後と向き合い方を決める。限られた財源を真に住民の暮らしに役立てるには、市の職員が住民の暮らしを知らなければならぬとして、市長自らが現場・住民の暮らす場に行く。科学的なものの見方と観察により、適格な援助・住民の暮らしを下支えする財政運営がされている。だからにこやかなんだ！納得。中川さんのお話のなかには宝石のような言葉がぼろ、ぼろとある。困難を重ねる人や家族に寄り添い見守るなかで見出した真実の言葉に、ハッとする。「違いを価値に高める」！最後に千秋さんが「人間に価値づけしてはいけない。お互いがつながりあって存在する」と、中川さんの言葉を正確に理解するよう言われた。人間いろいろ、人間ちょぼちょぼ、手をつなぎあって生きている…私の手はつながっているか？と問う。

2019年前半 **哲学カフェ、第22期の予定**

場所 岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

例会は19:00～21:00です。

第127回例会 1月10日(木)	「激動の世界、新年の展望を語る」(＝新年会も) * 昨年に続いて、今年も激動する世界・日本、これにどう向き合うのか。 * 平穏無事に行きそうもない中、飲食物を持ちより、真剣かつ楽しく語り合う場に。 ⇒開始時間を6:30にします。酒類はなし。よろしく参集願います。	終了 しました
第128回例会 2月14日(木)	「消費税アップは当然？ キャッシュレスで税還元？」 * 10%へのアップは決まっている、あとは軽減をどうするか、でいいのか？ * カード利用で還元も、とはどういうものか。税収構造にも切り込まなくては？	終了 しました
第129回例会 3月14日(木)	「どうすれば韓国・北朝鮮と仲良くなれるのか？」 * 圧力一辺倒の対北朝鮮。あらたに生じた徴用工問題などでの韓国との軋轢。 * どうしたら打開し仲良くできるのか、朝鮮観の根本的な転換が必要なのでは？	終了 しました
第130回例会 4月11日(木)	「若者が希望をもてる日本社会にするには？」 * 近年、どのような課題を解こうとも、ネックになっているのが若者支援問題。 * 教育、労働、社会・政治参加など、様々な分野での根本的施策が求められている。	終了 しました
第131回例会 5月9日(木)	「日本の死刑制度はこのままでよいのか？」 * オーム真理教死刑囚の大量執行で再び問題化されてきた日本の死刑制度。 * 裁判員制度の下での死刑判断の過酷さなど、あらためて根底から問い直す。	終了 しました
第132回例会 6月16日(日)	創立11周年記念行事 ハートフルスクエアG 大研修室 13:30～ シンポジウム「人口減少化社会にどう備えるのか？」 * これに取り組んでいる岐阜県飛騨市長と、若者支援に力を注ぐNPO代表を招いて意見交換	終了 しました
第133回例会 7月11日(木)	「人口知能(AI)の進展は人間に何をもたらすのか？」 * 通信、情報、労働のみならず、囲碁やスポーツの分野まで急速に進展するAI。 * いずれ人間の知能を超えるかもしれないとされるが、はたしてその行く末は？	

哲学カフェの運営資金の協力 も、よろしくお願ひします。口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !! <http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>

または「哲学カフェ岐阜」で検索

わいわいがやがや
アラカルト

- ★11周年記念シンポは、70名余りの参加で賑わいました。初めての方や県外からの参加者も多く、久しぶりにお目にかかれた方もあり、大変うれしく思いました。1年に一回、何回か続くことはいいものですね。
- ★感想もたくさん寄せて頂きました。とくに、住民の中に入り、要望や提案を次々に実現していく都竹市長の軽快さと、青年たちの目線に立って共同しながら歩む中川さんの姿勢に、大きな共感が寄せられていました。
- ★それにつけても、地方自治体の困難や声に耳を傾けず、若者たちの苦境や苦悩にちっとも思いを馳せない政府の姿勢はひどすぎますね。とくに、6月23日「沖縄慰霊の日」の安倍首相挨拶はひどいものでしたね。「新基地工事は中止せよ！」という沖縄県民の声を完全に無視。
- ★実はその前日の22日に、『沖縄スパイ戦史』を各務原でも上映して頂けたので観に行きました。この映画は、戦争末期に「陸軍中野学校」出身の若き将校42名が沖縄に派遣され、ゲリラ戦・スパイ戦を指揮し、数々の惨劇をもたらした告発の記録です。
- ★全編2時間、『標的の島』を撮った三上、大矢両監督は、村の少年隊たちを組織し、対米軍ゲリラ戦だけでなく、村民たちへのスパイ戦、さらに八重山群島での強制移住の惨劇など、戦後70年以上経って初めて明らかになった事実を、証言と記録をもとに、克明に描く。
- ★この惨劇は過去のものとしてではなく、「特定秘密保護法」「安全保障関連法(＝戦争法)」強行採決や憲法改悪の推進によって、いまあらためて現実味を帯びてきている。「軍隊は国民を守らない」「二度と戦争をしてはならない」という証言者たちの叫びは、ドーンとボクの心に突き刺さる。